

## 松江のものづくり—木地師・二代小林幸八の仕事—

令和4年2月22日（火）～4月3日（日）

二代小<sup>こ</sup>林<sup>ばやし</sup>幸<sup>こう</sup>八<sup>はち</sup>（本名：安達真市 1878-1935）は松江市八雲町熊野出身の木地師です。

初代小林幸八（1851-1920）に木<sup>も</sup>工<sup>っ</sup>轆<sup>こう</sup>轆<sup>ろくろ</sup>を習った二代幸八は、盆や蓋物、棗、香合を多く制作し、数々の賞を受賞しました。塗師である五代漆壺斎の木地も挽いています。二代小林幸八が使用した道具や未成品などは、一括で松江市の指定文化財（有形民俗文化財）となっています。本展では二代幸八の道具や未成品などの一部をご紹介します。

（※いずれの資料も松江市蔵）

### 二代小林幸八の仕事について

木工は、重厚感ある木の質感や木目の美しさを活かす工芸です。

木工芸の技法は、木材の取り扱いの違いにより名称が違い、「<sup>ひきもの</sup>挽物」「<sup>さしもの</sup>指物」「<sup>くりもの</sup>刳物」「<sup>まげもの</sup>曲物」「<sup>ほりもの</sup>彫物」があります。二代幸八は、主に**挽物**を中心に作品作りをおこなってしました。挽物とは、大まかに成形した木材を、<sup>ろくろ</sup>轆轆という回転する道具に取り付け、<sup>ろくろ</sup>轆轆<sup>かん</sup>鉋という刃物をあてて、木材を削り成形していく技法です。挽物は、椀など丸い形を作るのに適しているため、二代幸八の作品も、盆や蓋物などの曲線の作品が数多く存在します。松江市指定文化財（有形民俗文化財）に指定されているものは、道具以外に未成品がほとんどですが、二代幸八は、金平糖入れなど珍しいものや、蓋の内側と外側に別の木材を使って作った刻みたばこ入れなど、興味深い作品を制作しました。



図 1： 木地師道具の一部（奥の台が轆轆、右手前の刃物が轆轆鉋）



図 2： 刻みたばこ入れ

展示資料

	資料名称	画像
1	棗	
2	刻みたばこ入	
3	金平糖入れ	
4	茶托	
5	茶托	
6	看板	
7	茶托	
8	工具類 轆轤鉋	

他 4点

全 12点展示予定